



# 上智大学短期大学部

## SOPHIA UNIVERSITY JUNIOR COLLEGE DIVISION

令和2年(2020年)12月10日

### 通信 第97号

編集・発行 上智大学短期大学部

## 2020年の上智大学短期大学部

学長 山本 浩

今年も残り少なくなってきましたが、2020年がこのような年になるとは夢にも思いませんでした。昨年末から今年の年始にかけて、中国の武漢で原因不明の肺炎患者が集団発生しているという報道がありましたが、そのニュースを新聞で見たときには、この新しい感染症が数ヶ月後に世界中に広がるなどとは想像もできませんでした。

1月末に秋学期の授業が終わり、2月1日にA日程の一般入試を予定どおり実施しましたが、このときは今から思うと嵐の前の静けさでした。それから数日後に横浜に入港した客船ダイヤモンド・プリンセス号で新型コロナウイルスの集団感染が発生し、感染者数の増加が連日報道されるに及んで、世の中はこの得体の知れないウイルスへの対応に右往左往することになりました。

短期大学部では、2月末に卒業式の中止を決定し、発表しました。それにより、卒業式が予定されていた3月14日には、例年のような卒業生、父兄、教職員が一堂に会しての式の代わりに卒業生はゼミごとに分かれて集まり、ゼミ担当教員から一人ずつ学位記が手渡されました。学長の私は、いくつもの教室に分かれて集まっている卒業生に向けて校内放送ではなむけの言葉を贈りました。

3月11日には入学式とオリエンテーション・キャンプの中止を発表し、16日には春学期の授業開始を2週間遅らせることも発表しました。新年度になった早々、4月1日には授業開始を再度遅らせ5月25日からと決めました。4月7日に政府によって緊急事態が宣言されると、教職員は自宅でのテレワークを余儀なくされ、Zoomでの会議、EメールやMS Teamsでの情報や文書の交換などによって仕事を進めていきました。そして、慎重な検討の結果、学生と教職員の感染リスクを最小限にするために春学期の全授業をオンラインで行うことを決定し、4月15日に発表しました。

授業をオンラインで行うことに決定してからは、オンライン授業の方法や進め方についてのマニュアル作成、Moodleやその他のアプリケーションの

使用方法についてのマニュアル作成、教職員対象のワークショップの開催、Zoomによる会合での情報交換、教室のスタジオ化、ネット環境が十分でない学生へのWi-FiルーターとノートPCの貸し出し等々、オンライン授業を予定どおり開始し、順調に実施していくための準備に精力を傾注しました。また、学生たちもオンラインで春学期の履修登録を行い、授業開始を待ちました。

5月25日にオンライン授業が始まると、Moodleがダウンするという思いがけない事故がありました。が、まずまず順調に春学期が進んでいきました。しかし学期が進んでいくにつれて、「課題が多くて寝る時間もない」「課題、課題で休む暇もない」といった声が学生たちから聞こえてきました。また、ある程度予想されていたことではありましたが、学生の中には毎日一人でPCに向かってオンライン授業を受けていることから孤立感が強くなり精神的に苦しい状況にある者たちがいるという問題が浮上してきました。とくにこの問題は、オンライン授業が続くあいだは起こりうることで、簡単には解決できない課題として苦慮しています。

7月には、さまざまな事柄を考慮した結果、本当につらい決断でしたが、秋学期のオンライン授業継続を決定し、発表しました。オンライン授業かどうかは秋学期に学生たちが住む場所と関わるため、早めに決定しなければなりません。また7月には、学生たちを対象にオンライン授業に関するアンケート調査を行い、秋学期のオンライン授業実施のための参考資料としました。

夏期休暇が終わり、9月末に秋学期が始まりましたが、1年生の「プレ・ゼミナール」と2年生の「ゼミナールII」については、対面授業とZoom授業を融合したハイブリッド式授業として実施しています。新型コロナウイルスの感染が今後どのように推移していくか不明のため、1、2ヶ月先のこともなかなか決めづらい状況が続いています。困難な状況下で、教育、研究、学校運営が円滑に進められるように努力している今日この頃です。

## コロナ禍での授業実施と学生の学びについて

英語科長 永野良博

2020年度の本学での授業は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、春学期にはその全てを遠隔で実施し、秋学期にはほぼ全てを遠隔としながらも、一部をハイブリッド式として、キャンパス内の教室での対面授業とオンライン上での遠隔授業を同時に実施する取り組みを開始しました。

春の緊急事態宣言を受け学期開始を4月14日から5月25日へと遅らせ、その間に本学教職員は遠隔授業を効果的に行うための準備を進めました。教職員間のワークショップを実施し、遠隔授業の運営方法やそこで必要なPCやネット上での技術についても理解を深め、授業計画を練り直した上で授業を開始しました。そして両学期を通じ、遠隔授業に関わるオンライン上の会議で、意見交換を継続しています。また学生のWi-Fi環境の充実のため、数は限られていましたがルーターの貸し出しを行う等の対応を行いました。コロナ禍においても教育の質を高く保ち、学生が最大限の学修成果を獲得出来るよう体制を整え、改善の努力を続けて参りました。

また授業開始が遅れたことで、本来であれば14週予定されていた授業期間が10週に短縮されましたが、単位付与に必要な学びの確保のため、4週分の学習を10週に課題学習として取り込みました。そのため、学生にとっても教職員にとっても非常に濃密な10週間となりました。コロナ禍の不安やストレスがある中、特に学生の皆さんが新たな授業形態に対応し学びに真摯に取り組んでくれたこと、そして保護者の皆さんのご理解、ご支援には大変感謝しております。

秋学期は予定通りに9月28日に開始され、そこで上述のようにハイブリッ

ド式の授業を導入しました。具体的には、1年次生と2年次生の全ての学生が履修する必修科目である「プレゼミナール」(1年次生向け)と「ゼミナールII」(2年次生向け)を対象に、教室でこれまで通りの授業を行いながら、オンライン上のZoomを使い遠隔地で学ぶ学生も同時進行でそこに参加出来るような体制での授業です。

また秋学期の全体的授業実施形態について記しますと、合計で117ある開講科目中、Zoomを用いたリアルタイムの授業が93科目(ここにハイブリッド型ゼミナールも含まれます)、音声付のパワーポイントや映像配信などを用いたオンデマンド型の授業が1科目、音声や映像はなく提示された資料を読んで課題を解くオンデマンド型の授業が1科目、そしてそれらの組み合わせが22科目です。Zoomを用いたリアルタイムの授業が多く、そこでは教室内の対面授業に近い形で学生が発言や発表を通して参加し、能動的な学びを得ることが出来るよう試みています。それは本学の卒業認定・学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、そして入学受け入れの方針で明らかにされている主体的かつ能動的な学びの促進と合致するものです。

秋学期中間時の現在では、ハイブリッド式の授業の継続を含め、キャンパスの開放に向けた動きを取りつつあります。ウイルス感染拡大は予断を許さない状況ではありますが、本学はキャンパス内であっても遠隔であっても変わらぬ質の高い教育を提供し向学心の強い学生の学びの継続のため、更なる努力を行ってゆく所存です。

**FACULTY VOICE**

**サバティカル(研究休暇)を終えて**

教授 丹木 博一

2019年の秋学期、サバティカル休暇をいただいた。外的刺激を遠ざけ、読書と思索に専念できることを心待ちにしていた。当初は上智大学の図書館に通うつもりだったが、知り合いに会って仕事を頼まれたりすると、それまでの生活と変わらなくなってしまう。できるだけ誰にも会わない方法はないか。もちろん家に引きこもってあればよいのだが、小さな部屋のなかにはいつしか溜まってしまった骨董やら美術書やらが散乱して気が散る。集中するにはむしろ、午前中の早い時間に家を出て、不特定多数の知らない人のなかに身を置いて孤独になる方がよい。そう考えて、住まいのある東中野から三鷹までの定期券を買い、その日の気の向くままに下車し、カフェをハシゴして過ごすことにした。

これまで私は、主に二つの哲学的研究課題に取り組んできた。私がこの世界に存在する意味は何か、存在理解と自由の関係はどうなっているのかといった問いを、特にハイデガーと西田幾多郎のテキストに即して現象学的に考察することが一つ。できれば休暇中に、これまでの研究成果をまとめ、それに少し書き足して、本にする計画を進めたいと考えていた。もう一つは、かつて看護系大学に勤務して以来関心を寄せてきた、人間にとってケアとは何を意味するのか、望ましいケアの可能性はどのようなものかという問いの探求である。こちらについては、先に『いのちの生成とケアリング』という本を出したが、そこで提示した論点をさらに深めたいというのが、今回のもう一つの目的であった。ハイデガーや西田のテキストにじっくり取り組む時間が与えられたことに加

え、鈴木大拙や井筒俊彦を通して、東洋的伝統に目を見開かれ、分別知と無分別知の関係に興味を引き寄せられたこと、またフーコーやアガンベンを通して、真理把握と修練による自己変容との相関に気付かれ、ハビトゥスによる自己形成の可能性に注意が向かうようになったことが、今回の成果だった。これまで並行して行ってきた二つの研究が事柄の深層において実は通底しているという実感を手に入れることができたのも僥倖であった。残念ながら出版計画を具体化するには至らなかったが、それでも期間中、論文を2本仕上げた。

もちろんこの間、ただ中央線の一区画だけをうろついていたわけではない。甥の結婚式が福岡で行われたついでに足を伸ばし、かねて憧れの唐津焼の里に赴いたりもした。唐津城を臨む松浦川の静謐な水面(写真)や、島々からなる夕景を映してどこまでも静かに甞いた唐津湾の佇まいが今も忘れられない。また、定期券を上野までに切り替えて、東京国立博物館の常設展に通った時期もあった。ちょうどその頃、室生寺の釈迦如来坐像と十一面観音立像が招来されていた。苦しみを潜り抜けた者だけに認められる安らかで柔和な容姿を通して、何か豊かなものに包まれゆく心地がしたことを思い出す。



**2020 Spring Semester Sabbatical Report**

准教授 Chris Oliver

Like much else in the spring of 2020, my sabbatical was greatly disrupted by the COVID-19 pandemic. My sabbatical research theme was “models of empathy” and was aimed at examining how notions of “empathy” are used in spheres ranging from education to immigration to artificial intelligence. There were a number of conferences and symposia originally scheduled to be held overseas that I had been eager to attend, but one by one they were canceled; even if they hadn’t been, international travel would have been out of the question. Fortunately, however, two of the overseas events that I had hoped to attend transitioned to being held online and I could partake in them.

One was the annual conference of the International Communication Association in late May. For the most part, the conference was held in an asynchronous manner, with presenters pre-recording their presentations and uploading them to the conference website, where virtual attendees could view them any time over the week of the conference.

Some of the most interesting presentations to me were concerned with the “emotional” aspect of interactions between humans and robots or other machines embodying artificial intelligence. Indeed, it seems that “social robots” are increasingly being regarded as agentive actors in communicative engagements



with people, capable of evoking emotional responses from and even being seen as empathetic actors by the people they interact with. Especially intriguing to me were presentations dealing with social robots designed to emulate

human empathetic behavior. Such presentations provided good food for thought on the modeling of “empathy” in the realm of robotics and artificial intelligence.

A second virtual event that I was able to attend was the annual IMISCOE (International Migration, Integration and Social Cohesion in Europe) conference, held in early July. This conference was held in real-time—Central European Summer Time, in this case—with presenters giving their talks “live” to an online audience.

The presentations were multidisciplinary and thematically wide ranging, but what caught my interest most were those addressing efforts at the human-level integration of immigrants into European societies, an ongoing concern in the wake of the refugee crisis of 2015. One such presentation, for instance, looked at how EU-sponsored initiatives at fostering intercultural dialogue involving immigrants are being played out in central Italy. While few of the presentations I saw touched directly upon empathy per se, it was nonetheless valuable to consider how questions of empathy may be framed in terms of people in positions of vulnerability vis-à-vis broad socio-political projects: not only the difficulty of truly understanding the vulnerability experienced by refugees or other liminal members of society, but also how this may be impelled and given direction by governmental or other societal forces.

While the coronavirus pandemic greatly curtailed the activities I had previously envisioned for my sabbatical, I was nonetheless able to take in presentations from researchers from Australia, Chile, Germany, Finland, Iceland, Italy, South Korea, Spain, Sweden, and elsewhere. This diversity of perspectives helped broaden my perspective on the issue I set out to examine during my sabbatical.

**2019年度卒業式・学位授与式に代わるゼミ別集会の実施**

2019年度卒業式・学位授与式は、2020年3月14日(土)に執り行われる予定であったが、新型コロナウイルス感染症の大規模な感染拡大リスクがあることを考慮した結果、残念ながら中止となった。

その代わり、卒業生のみを対象とした「ゼミ別集会」を同日に実施した。卒業生の出席は任意とし、感染のリスクを軽減するため、ゼミナールごとに教室を分け、時間は午前・午後の2回に分散し、かつ短時間とした。

ゼミ別集会の冒頭では、山本浩学長より校内放送を通じて、卒業生にメッセージが伝えられた。

「皆さんは今日までの2年間、教室での授業をとおして、また教室外での様々な活動をとおして、「Men and Women for Others, with Others - 他者のために、他者とともに」という上智の教育精神に触れてきたことと思います。これからも「他者のために、他者ととともに」という上智の精神を忘れることなく、他者に寄り添った人として生きていていただきたいと願っています」と語りかけ、卒業式で朗読される予定であった新約聖書・ルカによる福音書10章「善きサマリヤ人のたとえ」を紹介した。

また、「今後、どのような世界にあっても、忘れずに心がけてほしいと思っていることがあります。それは、何かを判断し決断するとき、付和雷同することなく、自分の頭でじっくりと考えて自分で結論を出して行動してほしいということです。これからの人生の中で、必ずや大きな困難に出会ったり、右に進むべきか左に進むべきか判断に迷う岐路にさしかかったりすることがあるはずですが、そのようなときに、自らの考えに基づいた判断をしてほしいと思います。不確かな情報によって左右されたり、他人の無責任な言動に動かされたり、無意味な流行や時流に流されたりすることなく、自分でよく考え、自分で判断して、自分の進むべき道を見つけていってほしいと思います」と述べて、卒業生たちを激励した。

その後、卒業生はゼミナール担当教員から一人ひとり学位記を授与され、友人や先生たちと名残りを惜しみつつ、思い出の詰まった学び舎を後にした。





2020年は新型コロナウイルス感染防止対策の影響で数々の行事が中止・延期となりました。ソフィア会の活動も四谷・秦野キャンパスへ集まるイベントは実施せず、オンライン・SNSを活用した活動となりました。



2020年3月14日 短期大学部卒業式 祝辞  
短期大学部ソフィア会HP掲載 平野由紀子会長

ソフィア会会長の平野由紀子です。同窓会を代表してお祝いのご挨拶を申し上げます。

本来なら、桜も咲き始めた初春のキャンパスで、希望に輝く笑顔にあふれた若々しいみなさんの華やかな振袖や袴姿など、まさに百花繚乱の中で、ソフィア会より旅立ちのエールをお贈りすることをとても楽しみに待っていました。多くの友人やご家族、そして教職員の皆様方と一緒に会して、喜びをともにできなかったことはとても残念ですが、逆に今日のこの日は、みなさんの記憶に長く残り、生涯思い出深いものになることと思います。

多くのみなさんにとって秦野での日々は学びの最終と考えているでしょう。しかしそれは仕上げとは言えません。昨年話題となった木村拓哉主演の「グランメゾン東京」をご覧になった方も多いと思いますが、第4話では、フルコースの最後に出るデザートが取り上げられていました。締めくくりの役割を託されるスイーツこそは、大変重要であり難しいと。ドラマでは主人公と新人パティシエの対決で、どちらが採用されるか緊迫する雰囲気の中、厳しい採点をする雑誌編集長は新人パティシエに軍配を上げました。どちらも素晴らしい。でもこちらのお皿は、何より見た目が美しかったです。

毎年の学位授与式での卒業生の美しさを思い出し、この言葉が重くなりました。最高学府で高い教養を身につけたみなさんは、この恵まれた環境から出て、これから社会でそれぞれの花を咲かせます。そこで美しく咲いてこそ、今までの時間は素晴らしいと初めて言えるのです。これから、そのことを証明する人生が始まります。がんばってください。先に巣立った者の一員として応援します。

ソフィア会は、毎年5月に四谷キャンパスでみなさんを迎えるホームカミングを始め、いろいろなイベントを通して、卒業生同士の親交を深める助けをするほか、あとに続く在校生を支援するために母校に貢献する活動などを行っています。まずは気軽にご参加いただき、先輩や友人、そして恩師と集う場としてどうぞご利用ください。そのような場で、再びお目にかかることを心待ちにしております。今日は、ご卒業まことにおめでとうございます。

2019年度 ジェラルド・バリー賞 受賞学生 橋口 桜さん

ジェラルド・バリー賞という名誉ある賞をソフィア会の皆様から頂くことができ、大変嬉しく思います。

上智短大での2年間は、様々なことに挑戦し、興味を広げ、自分自身と向き合うことができた、とても貴重な時間でした。課題が重なった時や、編入試験前など、余裕がなくなり苦しい時もありましたが、先生方をはじめとする沢山の方々にもいつも温かく支えて頂きました。また、強い意志と考えを持ち、ひたすらに努力をする友人たちに出会い、共に励まし合いながら重ねた日々は、私にとって大切なものです。2年間を上智短大生として過ごせたことを心から誇りに思います。

4月からは、上智大学総合グローバル学部へ編入します。新たな環境で学び続けられることへの感謝を忘れず、そして新たな出会いを大切に、次の目標に向かって努力していきたいです。この度は、ありがとうございました。



ソフィア会活動紹介2020 VTR

2020年は新型コロナウイルス感染防止対策のため、ソフィア会が毎年開催していますルビー祝・銀祝の式典も来年度に延期と決定しました。7期生・22期生との合同開催となります。6期生・21期生の卒業生のみなさまにはプレ企画として初のZoom同窓会を企画ご案内いたしました。残念ながら人数が少なく中止とさせていただきます。代わりにソフィア会の活動紹介のVTRを作成し、オンラインSJ祭2020のコンテンツの一つとして参加しました。ご視聴いただけましたでしょうか。

Zoom同窓会の企画はみなさまの希望や社会状況により今後も検討していきたいと考えております。

SJ祭実行委員とソフィア会コラボ企画 寄付金付きソフィアグッズ販売

今年もオンラインSJ祭にて、実行委員会企画のソフィアカラーに鷲のマークを付けたパーカー、T-シャツ、マカロン付箋、トートバッグ、の販売がありました。

パーカーとT-シャツの売り上げに連動して1枚につき100円の寄付をソフィア会より2020年ノーベル平和賞受賞の国連世界食糧計画（WFP）へ寄付をするという企画でした。

最終的に13,200円をWFPへ寄付することができました。

Zoomを利用した役員会を開催



Zoom役員会 6.13



Zoom役員会 9.26

今年の役員会はすべてZoomを利用して実施しました。遠方にお住まいの方も参加が可能となり新しい形の会議となりました。

2020年度総会

ソフィア会HPに議案を掲載し各議案の承認を得ました。

上智大学短期大学部ソフィア会会長 平野由紀子

2020年5月、百年に一度という厄災に直面しているみなさまにお見舞い申し上げます。

日本のみならず世界中を巻き込んだこの危機にあつて、短期大学部では3月卒業式や4月入学式は中止となり、春学期はオンライン授業となりました。ソフィア会行事も毎年5月に四谷キャンパスで開催されるオールソフィアンの集い（ASF）での短期大学部ソフィア会総会と講演会、ホームカミングも残念ながら中止となりました。

このような緊急事態であることを鑑み、特例ではございますが、2020年度の総会についての議事等をHP上にてご報告し承認とさせていただきます。今年度の活動を継続させていきたいと存じます。

また、大きな社会や経済の変化で被害を被っている短期大学部の学生に対し、修学継続の支援を含めた学生支援を全力でバックアップしていきたいと考えています。緊急支援として奨学金として215万円を寄付することにいたしました。同時にSOPHA 未来募金で学生支援の募金も始まりました。ご協力をよろしくお願いいたします。

現在の情勢が終息し安定した日常に戻って参りましたら、本来の活動を再開し、一日も早く卒業生のみなさまとお会いできる日が来るように願っています。それまではHP等で情報を発信して参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

この困難な状況の中で、解決のために日々努力されているいろいろな方々のために祈ります。

今こそ希望を忘れず、ソフィアンの絆を再確認することができますように。

上智大学短期大学部ソフィア会(同窓会)  
2019年度 決算報告

(2019年4月1日～2020年3月31日) 2020年3月31日現在

(単位: 円)

【収入の部】		
費目	金額	備考
前年度繰越金	21,950,373	
2019年度収入		
同窓会会費	5,120,000	2019年度入学者 (@20,000円×256人)
総会及び銀祝参加費	120,000	銀祝参加費、祝状代
寄付金預かり	22,913	バリー賞基金、被災者学生支援金
利息	214,400	上智学院預り金利息、普通預金利息
(2019年度収入小計)	5,477,313	
合計	27,427,686	

【支出の部】		
費目	金額	備考
短大通信送付費用	616,612	
総会通知郵送費	530,050	
ルビー祝・銀祝通知郵送費	59,324	
パーティー代その他	331,490	ホームカミング 及び ルビー祝・銀祝パーティーケータリング代、賞品代等
通信費	209,240	同窓会事務局通信費(インターネット料金等)
交通費	106,584	役員会会場までの役員交通費、キャリアアブランチング講師交通費等
文具及び消耗品費	15,792	プリンターインク代、文具代、コピー代等
会議費	98,968	役員会食事代、会議室代
郵送費	3,944	郵便代、宅配便等
広告宣伝費	123,560	短大ソフィア会HP維持管理費等
慶弔費	0	
交際費	0	
送金手数料	4,987	
寄付金	1,422,913	2019年度奨学金(90万円)、バリー賞基金、被災者学生支援金、聖マリア寮感謝の集い(閉寮に伴うイベント)に対して(50万円)
中途退学者への会費返金	90,000	
(2019年度支出小計)	3,613,464	
次年度繰越金	23,814,222	
合計	27,427,686	

## 2019年度 グッドティーチング賞

教育実践に顕著な成果をあげた教員に贈られるグッドティーチング賞の2019年度受賞者がChris Oliver准教授並びに河北 祐子非常勤講師に決まった。授賞式が2020年10月20日(火)にZoomで行われた。

受賞に際し、Oliver准教授から以下のコメントをいただいた。



I am honored to receive a Good Teaching Award for the 2019 academic year. Surely this has much to do with the generous spirit and kind-hearted nature of SUJCD students when it came time to write my

course evaluations. But I think it is also due to the fact that the students who took my two larger elective classes—Intercultural Communication and Cultural Anthropology, with a combined enrollment of about 160—were good, hardworking students who did not shy away from challenging themselves with lecture-based courses taught entirely in English. In that sense, the award is a reflection of the studiousness and positive attitude of the students who elected to take my classes last year. To them, thank you. I look forward to having more of such students in the semesters to come.



## 2019年度学長賞・2020年度学業優秀賞

2019年度学長賞は、稲垣 乃映さん、加藤 想さん、トラン ティ シュン ジューさん、中尾 妃夏さんの4名に授与された。

稲垣さん、加藤さん、トランさんはサービスマーケティング活動(カレッジフレンド)に熱心に取り組み、上智の教育精神である「Men and Women for Others, with Others」を実践したことが選出の理由である。中尾さんは、学生団体主催(内閣官房長官、厚生労働省等後援)の「多文化共生政策立案コンテスト」に選考を勝ち抜いて参加し、8日間に亘る合宿形式のコンテストの中でフィールドワークを経て、政策案を立案した。中尾さんが本学で取り組んでいるサービスマーケティング活動(コミュニティフレンド)においても、この経験が活かされていると評価された。

また、1年次に優秀な成績を修めた学生に授与される学業優秀賞の2020年度受賞者が、金藤 里佳さん、小林 泉結さん、村山 裕美さん、武藤 菜々さん、中尾 妃夏さん、大竹 花さん、鈴木 真瑠さん、吉田 あみさんに決定した。

2020年度はコロナ禍により、授賞式を執り行うことができなかったが、受賞者には郵送にて賞状、副賞が贈られた。

## 上智大学短期大学部 2019年度決算及び2020年度予算

(単位:千円)

科 目		2019年度決算	2020年度予算	
教育活動収入	学生生徒等納付金	585,233	572,016	
	手数料	16,853	15,540	
	寄付金	1,200	0	
	経常費等補助金	52,775	85,790	
	(国庫補助金)	(52,690)	(85,710)	
	(地方公共団体補助金)	(85)	(80)	
	付随事業収入	12,222	0	
	雑収入	28,868	55,476	
	教育活動収入計	697,151	728,822	
	教育活動支出	人件費	425,046	423,260
		(退職給与引当金繰入額)	(57,965)	(52,764)
		教育研究経費	234,581	182,136
		(減価償却額)	(42,001)	(37,060)
		管理経費	71,223	32,360
(減価償却額)		(4,695)	(0)	
教育活動支出計		730,850	637,756	
教育活動収支差額	△ 33,699	91,066		
教育活動外収入	収入の事業活動	受取利息・配当金	5,383	0
		その他の教育活動外収入	0	0
	支出の事業活動	教育活動外収入計	5,383	0
		借入金等利息	0	0
		その他の教育活動外支出	0	0
	教育活動外支出計	0	0	
教育活動外収支差額	5,383	0		
経常収支差額	△ 28,316	91,066		
特別収支	収入の事業活動	資産売却差額	0	0
		その他の特別収入	667	46
		(施設設備寄附金)	(600)	0
		(現物寄付)	(67)	(46)
		特別収入計	667	46
	支出の事業活動	資産処分差額	182	729
		その他の特別支出	0	0
		特別支出計	182	729
		特別収支差額	485	△ 683
		[予備費]		6,000
基本金組入前当年度収支差額	△ 27,831	84,383		
基本金組入額合計	0	△ 113,046		
当年度収支差額	△ 27,831	△ 28,663		

## 2021年度 上智大学短期大学部学生納付金

(単位:円)

	新 入 生 (2021年度入学者)	在 学 生 (2020年度入学者)	摘 要
入学金	250,000	-	入学時のみ
在籍料	60,000	60,000	年額
授業料	682,000	682,000	年額
教育充実費	200,000	180,000	年額
小 計	1,192,000	922,000	
同窓会積立金	-	20,000	2年次徴収
英語力テスト受験料	9,390	3,130	1年次年3回、2年次年1回
学生教育研究災害傷害保険料	1,400	-	保険期間2年(※)
小 計	10,790	23,130	
合 計	1,202,790	945,130	

(※) 学生教育研究災害傷害保険料については、当初納入した金額に対する保険期間を過ぎて在学する場合、1年毎に納入が必要です。その場合、保険料は1年間で800円です。

## 入試日程のご案内

上智大学短期大学部の教育は、キリスト教ヒューマンズムに基づいた教育の精神である「他者のために、他者とともに(Men and Women for Others, with Others)」を国際社会において実践することのできる英語発信力と国際性(Global Competency)の涵養を目指しています。受験生の皆様には、本学での学びを進路の一つとしてご検討いただければ幸いです。

短期大学部では入学志願者の能力・意欲・適性等を多面的・総合的に評価・判定することを目的とし、多様な入試を実施しています。詳しくは入試要項をご確認ください。

今後実施する入試制度は右記のとおりです。

大学案内・入学願書のご請求は、本学HPトップページのテレメールをご利用ください。



上智大学短期大学部HP

種 別	募集人数	出願期間	試験日
一般選抜A日程	55	1月4日(月)～1月15日(金) (消印有効) 1月18日(月)～1月21日(木) (短大窓口受付) <sup>(注1)</sup>	2月1日(月)
一般選抜B日程	30	1月28日(木)～2月12日(金) (消印有効) 2月15日(月)～2月17日(水) (短大窓口受付) <sup>(注1)</sup>	2月19日(金)
一般選抜C日程	15	2月19日(金)～2月26日(金) (消印有効) 3月1日(月)・3月2日(火) (短大窓口受付) <sup>(注1)</sup>	3月4日(木)
総合型選抜 (課題文利用方式)	5	1月4日(月)～3月9日(火) a～dの出願期間があります <sup>(注2)</sup>	出願期間により異なります <sup>(注2)</sup>
総合型選抜(TEAP・ 英検等利用方式C)	8	1月4日(月)～3月9日(火) I～VIの出願期間があります <sup>(注2)</sup>	出願期間により異なります <sup>(注2)</sup>

(注1) 一般選抜A・B・C日程は、上智大学短期大学部(桑野キャンパス)で窓口受付を行います。  
(注2) 総合型選抜の課題文利用方式(a～d)・TEAP・英検等利用方式C(I～VI)の日程の詳細は本学ホームページでご確認ください。